
深雪の翼

櫻井八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深雪の翼

【Nコード】

N2392X

【作者名】

櫻井八雲

【あらすじ】

二〇七二年。国政府が新しく作った法律のおかげで生まれつき背中に大きな傷を持つ深雪は、十七歳の誕生日に異端者登録され、三ヶ月の間、保安官から逃げていた。

ある雨の日、深雪は一人の少年、帷と獣耳の少女蒼空と出逢う。帷はこの世に生を受けてから殺傷能力があるとされ、赤子から異端者登録されていた。

深雪は帷から国という匣から抜け出して新しく道を造っていこうと誘われる。

深雪は二度と元の生活には戻ることができないのだろうか。SF異端劇、ここに開幕。

No.0 異端劇、開幕（前書き）

この話は個人サイト「風輪桜草」に掲載する小説です。著作権は櫻井八雲にあります。

No.0 異端劇、開幕

世界なんて無くなってしまうばいいのにと思ったのは何度あったろうか…。

嵐の中、少年は雨に打たれながら考えていた。傍らには先程保安官から助けた獣耳の少女がいる。

もしかしたら、自分がこの世に生を受けてから逃げ続けていたためにこうして物事を思案する時間の方が或いは短かったのかも知れない。

少年には運命とか偶然がどういうものかわからない。しかし必然という言葉は知っている。必然は既に決まっており、人はその道を選択ざるを得ない。道を違えることすら叶わないのだ。

だが、と少年は雨の中思った。

自分が望まない必然を踏みにじることはできないだろうか。既に定まっていることをこの手で粉々に砕き、また新たな選択肢またはまだ決まっていない道を造り出し歩いていくことはできないだろうか。

もしそんなことができたとしたら、自分はどんな道を…。

「造り出していくのだろうか…」

自分より大分背の低い少女には聞こえない小さな声で、しかししっかりと呟いた。実際自分の歩む道なんて誰も解りはしない。先の未来がわかっていれば、それはそれで幾分か楽になり、すれば別の道を造ればいいのが見つかるだろうが…。

「ん？　どうかしたか？」

少女が瞳を閉じ耳を澄ませている。この子供は獣耳を使って例え遠くの視えない場所からでも周囲の音を拾うことができる。まあそのおかげでやっかいごとに捲き込んでいるのは事実なのだから。

音を拾い始めてから数分も経たないうちに少女は瞳をゆっくりと開けた。少年の顔を見上げる。

「何か聴こえたのか？」

「……………新しい人がいる……………」

「どんな奴だ？」

「判らない。好人なのか、…………それとも悪い人なのか…………」

己だけでは判断がつきにくいか。
まあいい。どうせこの少女を狙う奴であればその命を消すだけだ。
そうじゃなくても利用価値の無いものは、この国で勝手に滅びる。
それがルール。

政府が勝手に決めたイカれた法律。

「行くぞ。ソイツを見定める」

「お兄ちゃん…」

「大丈夫だ。下手に命を奪ったりはしない。お前は何処か安全なところ
に隠れてろ」

不安げに眉を潜める少女の頭を軽く叩き、少年は静かに雨の中を
歩き出した。

定まっている未来という道を壊しに異端者は歩き出す。

世界という壊れた匣を新しく造って行くために……。

殺傷能力を持った少年は。

歩みから走ることに変えた。

No.1 雨からの逃走（前書き）

この話の著作権は作者の作者櫻井八雲にあります。

No.1 雨からの逃走

——君は今までその事実を隠していたのかね？

——それは……

——いや、言いたくないのなら、別に構わない。だが、生まれた際に背中ものに気付かないことは重大であり危険だ。

よって今から君は異端者だ。

二〇七二年、六月二十四日。梅雨の時期に入っているから天気は雨。

技術が発達した【国】にまとまった雨が降り注ぐ中、深雪は“彼ら”から逃げていた。

この日は雨天にも関わらず気温が二十度以上と高めだ。地球の異

常気象が原因なのか例年よりも早く熱帯低気圧が近づいてきていると、携帯用のデジタルラジオから雑音入りで音質は悪いが、情報が流れてくるため、今現在の周囲の様子を伝えている。

まったく、何てありがたいんだ。こんな雨なら視界を悪くして“彼ら”に捕まりにくくしてくれる。水浸しになった足場はたださえ走りにくいのに、この上更に滑りやすくなっている。ありがたいけど、感謝なんてものは絶対にしてたまるか。向こうは雨で追いつらくなっているが、逃げている此方も此方で同じように逃げづらくなっている。この悪状況を作り出した天気の神様を一層恨んでやりたい。

そんなことを考えている間に深雪はどこか身を隠せる場所はないか辺りを見渡した。

いくつかの通りを越えた所から誰かが助けを求めている声が聞こえる。“彼ら”……“保安官”に捕まったのだ。

保安官は国の治安を守るために政府が送り込んだ施設の人間のこと。普通に暮らしていれば別に関わることはない。しかし、稀にこうして彼らは住人を捕獲している。防犯機能も充実しているため、犯罪率は極めて低い。なのにこうして、特に罪のない者達を捕まえる。そういう人は罪を犯した訳でもないのに。

施設に連れて行かれる者達の叫びを背中に受けながらも、ようやく古い民家の軒下に隙間を見つけ、咄嗟に潜り込んだ。近くで保安官たちの歩く音が止まる。多分、この第十三区エリアの担当保安官だと思う。

この国は大きく八十の区域に別れている。歴史としてはまだ新しい時に人種問題で政府と国民の間で大きな国内戦争が勃発した。

結果として政府が白旗を挙げて、更に人種差別が酷くなった。特に、生体検査で引っ掛かったものは異端者と認定される。

異端者は生まれつき身体に異常が診られるものになる。

コートの内ポケットから懐中時計を取り出す。丸く角がない時計には蓋がついていて開閉式になっている。蓋の裏にはアルファベツトで『MIYUKI』と自分の名前が小さく刻まれている。

昔、父親の所持品だった。木製で作られたか、樹を材料にした時計を初めて目にしたとき、アンティークデザインなのがいたく気に入り、欲しいとねだったが即答で「駄目だ」と言われてしまったことがある。

それでも時計の欲しさに毎日しつこく付きまとった結果、「オレの負けだな」と、ついに時計を譲ってくれた。

数日後。父親は原因不明の病で亡くなった。

結局懐中時計は形見になったが、深雪にとっても一生の宝物となった。

「えーと、今の時間はと……」

時間を確認すると未だに太陽が空にある時間帯だということがわかった。この時期、雨ばかり降るから昼間でも外は気温が低く、酷く薄暗い。もう夜が来たのかと勘違いしてしまうほどにだ。

時分がわかったところで、さてどうしようかと思案していると、奥の方から小さく咳き込む音がした。

ここは軒下だから立ち上がることは不可能。そのため、匍匐前進で向かう。

見ると、十歳程の少女が身体を縮めて震えていた。この雨だ。寒さで体温が低下するのは当たり前前だというのは、三ヶ月前から知っている。

「大丈夫？」

深雪は少女に話しかけた。

少女は気づいていないのか、はたまた気づいて心に恐怖心を抱いているのか、深雪を見ない。もう一度呼びかけると、今度はこちらの方を向いてくれた。

薄暗くてあまりはつきりとは見えないが、少女の髪の毛は黒い長めの髪、瞳は青い。それは彼女が奥で身体を潜めていても、すぐに分かる色だった。

深雪の呼び掛けに少女はうなずく。こっちへおいでと手をやると、それに従って大人しく来てくれた。

軒下から外の様子を見る。保安官の姿はない。他のエリアへと移動したのか、それとも…。

後者の方を頭を振って否定する。ない、絶対にないと思いたい。

深雪は確認のために何度も外を見る。やはり保安官の姿はない。

今なら他の場所に移動することが出来るかもしれない。深く息を吸って、肺に溜まっている空気を全て出すと、少女の手を掴んで軒下から雨の中に出た。一人で出てもよかったが、小さい子供一人を薄暗い軒下に残すわけにはいかない。もっと安全な場所に行かなければ。

心配げに少女が見上げてきた。

「これからどうするの？」

「とりあえず他に身を隠せるところを探す。君はこのまま逃げるんだ。それか保安官の元に行く」

少女の瞳が大きく開かれる。深雪の発言に驚いているらしい。

背丈に合わせて深雪はしゃがみこみ、少女の顔を見る。その時初めて気づいたが、少女は変わった帽子を被っていた。罈はなく、代わりに耳と後ろ髪が上手に隠れるように深緑でデザインされたものだった。服装も一五〇年以上も前の……。そう、確か着物と呼ばれる昔の服だ。白い長袖Ｔシャツの上に袖無しの真紅の衣、そして黒

のデニムパンツといった変わった出で立ち。可愛い姿からしてとても異端者とは思えない。

「お兄ちゃん、わたし、行きたくない……」

「大丈夫。保安官は君に悪いことはないよ。もしそんなことがあったら僕が助ける。だから、ね……？」

深雪は落ち着かせるように優しく言った。少女は最初戸惑っていたが、やがて首を縦に振ると静かに深雪から離れていく。距離が十分に出来た後、彼女とは正反対の方向に走り出した。

すぐに少女の助けを求める声が響く。けれど深雪は振り向かなかった。助けたい気持ちはある。しかし、例え助けたとして、保安官に捕まればどうなる？ それを考えると怖くなって……。

立ち止まって後ろを振り返る。雨でよく見えないが、今まさに保安官があの子を強制連行する最中だった。

このままじゃ 施設 に連れて行かれる。

少女が泣き叫ぶ。

「お兄ちゃん……助けて……！」

その時だった。

まるで、少女の言葉が合図だったかのようになり、突然深雪と同じく

らしい少年が現れた。

少年の周りにはすぐに十数人の保安官が取り囲み、所持している銃を向けた。残りの二人は少女をトラックの中に入れようとしていた。

あの子を連れてなんか行かせない。そう感じた深雪は駆け出して少女を助ける想いで保安官に突撃した。

少女を掴んでいた腕の力は想像していたよりも弱く、簡単に引き剥がすことが出来た。ぶつかった勢いで保安官の一人が気を失う。とっさに保安官から銃を奪い、もう一人に銃口を向ける。

「動かないで。そのままその子を僕に渡して下さい。言っておきますが、施設や政府に連絡とろうとしないで下さい。すぐに……頭を撃ちます」

保安官と深雪の距離はさほどなく、この距離なら間違いなく撃てる。外れることはないだろう。

多少抵抗すると思ったが、すぐに応じて少女を離してくれた。

「……ありがとうございます」

「こ、このまま逃げられると思うな。お前達が逃げた瞬間に、な、仲間が死ぬぞ」

「死ぬのはどっちなんだ？」

「だから、コイツらの仲間のお前が……………がつ」

言いかけたところで言葉が途切れ、保安官は地面に倒れた。同時に少女が保安官から逃げるように離れ、“彼”にすぎるようにして飛び付いた。

先程まで多くの保安官に囲まれていたあの少年だった。

同年代とは思えないその顔はしっかりと整っており、その目は何かを捉えようとした藍色の瞳。肩ぐらいまでの髪は灰色のようだが、光が当たっているときは星のように輝くだろうと思った。

この少年に助けられたのだろうか。深雪と彼の後ろにいる少女は。

少女は元から共に行動しているから助けたのだろうか。だが深雪は違う。なのになぜ自分まで助けられたのだろうか。

この少年は何者だろうか。

深く考えようとした深雪は、しかし考えがまとまらず、視界がグラリと揺れた。

足元がおぼつかなくなる。

そういえば、この三ヶ月の間はろくに食事をしていない。口にし

ていたものといえば水と……。

ポケットから白い粉状のものが入った袋が落ちる？

深雪はそこで地面に流れ込むようにして倒れ、意識を失った。

【t o b e c o n t i n u e . . .】

No.1 雨からの逃走（後書き）

「No.1 雨からの逃走」終了（？）です。

私は物語を書くときには最初、ノートに書きます。それからこうして機械類に打ち込む。

そうすると若干変わるところがでてきたり、文章が増えます。

今回もそうでした。話がスムーズに行く場合とそうでない場合が多々あります。他の作家様たちも同じ様なものですかね？

今回、やっと主人公を出すことが出来ました。いやあよかったです。

話の更新ペースは遅いですが、そこはどうかご了承下さい。

次回はもう少し早めに更新出来たら良いと思います。

No.2 外されし者の行方

— 父さん、何で僕の背中に大きな傷があるの？

— 深雪。それはな、お前が辛く苦しんでいる者を未来へ導くための標^{めし}なんだ。

— し……しるべ？

— そうだ。深雪、お前は選ばれた者なんだ。背中の傷だってただ単についている訳じゃあ、ないんだぞ。しっかりと誇りを持っているい。

— 誇り…。

— ああ。だけど深雪。どうしてそんなことを聞くんだ？

— だって、気になるんだもん。母さんに聞いても全く相手にしてくれないし。だから、何でも知ってる父さんに聞くしかないんだ。

— そうか。ならばあと一つ、お前に教えておくことがある。大事な話だ。お前の名前である「深雪」はな……………。

「僕の、名前は……」

眩きながら、深雪は目を覚ました。

雨の中で倒れていたのかと思いきや、深雪が眠っていたのはどこか知らない部屋だった。

見た目は昔を感じさせるような作り、和室といったところか。今の時代では見かけることのなくなったものばかりの置物がある。深雪は竹で編まれた床（畳）に敷かれた布団に横たわっていた。

ゆっくりと身体を起こす。特に目立った外傷はない。今着ている服も自分のものではなく、明らかに誰かに着せられたものだった。どうやってここに来たのだろうか。腕を組んで記憶を探る。

雨の中保安官から逃げ惑っていて、隠れ場所にピツタリな軒下を見つけ、そこに身を隠した。ここまでは覚えてる。それから女の子に会って、その子が保安官に捕まりそうになったときに、一人の少年が現れて……。

「……っ！」

考えをまとめようとすると頭痛がきた。目眩、吐き気、全ての気持ち悪さが集結したような気分だった。

あまりの気分の悪さに思わず口を覆う。覆っていないもう片方の手を近くの机に置いて布団から立ち上がった。

枕元に整えられた自分の服に着替えようとすると、廊下から足音が聞こえた。

足音は深雪がいる部屋の前で止まり、紙と木で形成された戸が開くと、一人の少女が入ってきた。

特徴のある青い瞳に黒く短い髪。そして変わった帽子……。

深雪はその少女を知っている。というよりも、あの軒下で出会ったばかりなので記憶が新しい。

少女はお盆に湯のみを乗せており、深雪の近くで腰を降ろすと、十歳とは思えない程の手つきでお茶を煎れ始めた。

「はい、どうぞ」

「あ……ありがとう……」

「熱いから、気を付けて飲んでね」

差し出されたお茶を受けとり、深雪は飲もうと口を近付けた。が、予想外に熱く、舌に火傷を負った。

「っー」

とつさに手で口を覆った深雪は、少女が心配気にこちらを見ていることに気が付いた。

「大丈夫だよ」と、口を覆いながら呟く。少女は安心したのか少し微笑んだ。深雪もつられて笑う。

少女の名前は「蒼い空」と書いて「蒼空^{ソラ}」というらしい。確かにその通りだと深雪は思った。黒い髪の中にある鮮やかな青い瞳は、まるで本物の青空を写し取ったように澄んでいて、キレイな瞳だった。

深雪も名乗ったが、幼いとはいえ十歳前後の少女に先に名乗らせてしまったことが失礼だと思い、己を悔やんだ。

疑問を少しでも簡潔に解決するために、この蒼空という少女に聞くことが先決だ。

「蒼空ちゃん、少し、聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと……？」

「そう。ここは何処なのか、僕はなんで寝ていたのか」

勿論この他にも聞かなければならないことが山ほどあったが、蒼空に聞くのは酷だと思い、この二つだけにした。

うーん、と 蒼空は顎に人差し指を当てて考える素振りをする。しかし、すぐに解いて答えてくれた。

「蒼空はずっといるから、よく分からない。でも、帷お兄ちゃんなら知っていると思う」

聞き慣れない単語が少女の口から出てきた。

トバリ…帷…？

「誰、それ……？ 蒼空ちゃんのお兄ちゃんかな……？」

「一緒には住んでるけど、兄妹じゃないよ」

「兄妹じゃ、ない……？」
「うん」

どういうことだ。一緒に暮らしてはいるのに兄妹じゃない？ きょうだいじゃない。キョーダイじゃない…。

つまり、血の繋がりはない。

訳が解らなくなってきた。兄妹じゃなければ何故一つ屋根の下で共に生活をしているんだ。

何か理由でもあつて、仕方なく住んでいるだけなのか。

考え事をしている深雪をよそに、蒼空は入ってきた方向に目をやった。勿論、襖は開いたまま。

そこに人がいることは深雪にもわかったが、しかし、誰が、どんな服装で入ってきたかまではわからなかった。

「あ、お兄ちゃん。今ね、深雪お兄ちゃんが……」

途中で言葉が途切れる。少女は今、帷という人物と会話をしているのだろうか。

再び思考を元に戻そうとしたか、胸ぐらを力強く捕まれ、深雪は驚きの声をあげた。

集中力が切れ、目の前には見覚えのある星のようで決して星ではない灰色の髪。瞳はやはり夜空を模写したような藍色。星と夜空の割合が逆転したように見える。それにしても、あまりに綺麗すぎる顔立ち。

服装は外とは大きく異なり、うぐいす色の着物に白い羽織を見に纏っていた。それだけを見ると、うぐいすが夜の星空へと羽ばたいていきそうだった。

深雪は無意識にその姿に見とれていた。この科学技術が発達した国で彼のような格好の者は、一般人でも異端者の間でもそうはいない。蒼空の服も同様だ。

いや、むしろ自分が知らないだけで、本当は現在でもこういう服（衣といった方がしっくりくるかも）を着ている人が他にもいるかもしれない。

「おい、聞いているのか！」

「え…？」

「さっきから話しているのに聞いていなかったのか」

少年が苛立ちながら言った。

そつえばさっきから何か言っているのに気づかなかった。

「う、ごめん…」

「本当に聞いていなかったんだな。もういい。また一から話せばいいことだ」

言いながら少年は胸倉から手を離し、諦めたのか息をついた。

蒼空は少しばかり困惑した表情をしている。まさか、目の前にいるこの少年がトバリなのか……。

聞いてみると、相手は何も言わずにただこちらを見据えている。否定はなく、肯定という証拠だった。

「あの……」

「あの雨の中、あの場所で何をしていた？」

言葉を紡ぎかけたが、先手を打たれた。

「正確には、昨日何をしようとしていた？」

「昨日……」

深雪は近くの壁時計を見る。自分が気を失ってから丸一日が経過しようとしていた。襖は開いたままで、外は晴れていた。小鳥のさえずりが部屋まで響いてくる。

昨日、と目覚めたときと同じように当時の記憶をなるべく適確に漏れの無いように思い出しながら話した。話を聞き終えた帷は腕を

組むと睨んだ。

「嘘だな。お前が話したことで俺が見たものとは全く違う」

「う、嘘なんかついていない」

「じゃあ本当のことを話せ」

「だから今話したのが本当だって……」

「俺が見たものはお前が土砂降りどしゃぶりの雨の中、蒼空を保安官に引き渡して逃げていたというところだ」

「逃げてなんかいないよ、蒼空ちゃんを保安官になんて引き渡してなんかもいない」

「だったらなぜ、蒼空は泣いていた？　なぜ泣きながら助けを求めているんだ！！」

言いながら今度は喉ぼとけを強く掴んできた。人間の急所のひとつ。ここを押し潰されたら一環の終わりだ。

立ちかけた深雪の体が再び倒れる。反抗しようとしたが、喉が苦しくなり呼吸ができない。

蒼空が帷を止めにかかるが、彼の力が強すぎるのか、二人を引き離そうとしても失敗に終わる。

「お前は自分だけ助かろうとしていた。違うか？」

苦しい中でもとても静かに聞こえる声。何かを問いだすその声は、聞いている深雪を落ち着かせ、自分をも冷静になろうとしていた。同時に本当のことが思い出せるようになる。

僕は軒下で蒼空ちゃんに出会った。保安官の元に行くようには言ったが、捕まるようにとは言っていない。いや、違う……。本当はただ、自分だけが助かればいいと思っていたかもしれない。彼女が異端者だつてことも知っていた。学校の友達に記憶力がいいと誉められた翌日、授業で現在の異端者の名簿を先生から見せてもらった。その中に彼ら二人の名前も、顔写真とともにあった。

「……そうだ、知ってたんだ」

未だに首を捕まれているせいか、上手く呼吸をすることができない。しかし、何とか振り絞ってかすれた声で深雪はつぶやいた。

「僕は、君たち二人が異端者だつてことを知っていた。知っていながらもワザと何にも知らない振りをして蒼空ちゃんに近づいたんだ。すべては自分自身が保安官に捕まれないようにするため……。怖かったんだ。今までの暮らしから突然外されてしまったみたいで……。これからどうなるかわからない、ただ真っ暗な闇の中に一人でいることがすごく、辛くて……。恐ろしかった」

涙が膝の上に落ちる。

N o . 2 外されし者の行方（後書き）

まだN o . 2 終わっていません。近いうちに続きを更新したいと思っていますので、どうかお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2392x/>

深雪の翼

2011年12月7日22時51分発行